



俳諧一葉集

二



伊地知文庫
 文庫20
 355
 2



文庫20
355
2



俳諧一葉集附合之部一
伊地知氏書冊



古学庵佛号
幻窓 湖中
坎窩 久藏 校 編

延寶五丁巳春

批書

此梅下生也初春と唱つて下
まーそや姓人下の作 信章
まの粉くまやまゝる身の中に
破味吸まー下の神衣の下菊 青
摺紙を差込おすところも
むろーとーの男ゆりり
章

賜のひげをたぐる世の月
瓜はくゆくや一曳の山
玉すけのまのまのさる果の花
ひぐさのちゆうの住ぶりの松
淡路一は仕形を新のまをええ
友よふとりののこころあつある
まはりのまの白鶴の橙の毛
森のふゆの本葉六そ
古昔原ふたれと道へふたつ
まはりのまのまのまのまのま
急の秋にたるとのまのまのま
吉祥天女とらねむりの月

青章 青章 青章 青章 青章 青章 青章 青章

あつとくは強路うる山から
松のゆくはひく再たふ
大星の代をそそりかろのいそ
かすみそもろき天竺のまぬ
二とりのまのまのまのまのま
風進退を割る中へ
瞞の政をそそり京通いされ果て
うみあつりのまのまのまのま
地へゆくの石向なるとちひて
末の松山まはるま
子賀の浦まのまのまのまのま
まはりのまのまのまのまのま

青章 青章 青章 青章 青章 青章 青章 青章

小松やうらうらしきうらうらしき
其石よりうらうらしき女のうらうらしき
うらうらしき二階ハ切きうらうらしき
かきうらうらしき松屋きうらうらしき
うらうらしき長柄の松屋きうらうらしき
能因法師若衆のうらうらしき
思つてうらうらしき馬やうらうらしき
うらうらしきうらうらしき眼赤の月
飢饉うらうらしきうらうらしき秋の
うらうらしきうらうらしき秋の
うらうらしきうらうらしき秋の
うらうらしきうらうらしき秋の
うらうらしきうらうらしき秋の
うらうらしきうらうらしき秋の
うらうらしきうらうらしき秋の
うらうらしきうらうらしき秋の

青章 青章 青章 青章 青章 青章 青章 青章 青章 青章

新友の身ハうらうらしきうらうらしき
秋の陣一玉のうらうらしきうらうらしき
秋の陣一玉のうらうらしきうらうらしき
秋の陣一玉のうらうらしきうらうらしき
秋の陣一玉のうらうらしきうらうらしき
秋の陣一玉のうらうらしきうらうらしき
秋の陣一玉のうらうらしきうらうらしき
秋の陣一玉のうらうらしきうらうらしき
秋の陣一玉のうらうらしきうらうらしき
秋の陣一玉のうらうらしきうらうらしき
秋の陣一玉のうらうらしきうらうらしき
秋の陣一玉のうらうらしきうらうらしき
秋の陣一玉のうらうらしきうらうらしき
秋の陣一玉のうらうらしきうらうらしき
秋の陣一玉のうらうらしきうらうらしき
秋の陣一玉のうらうらしきうらうらしき

青章 青章 青章 青章 青章 青章 青章 青章 青章 青章

名
 いしきハ魔法ト書キト久入尺上
 七リシク入おめり
 筆端三井の古寺汲所けさ
 最々きく様しきめこち様
 階はぬら目くハ目く
 湯之井登り玉合の
 既手井か一更何くさめぬ
 白髪殿ハ沙年よく様
 つくしと向手たきく後山
 つけ入新屋ハ小姓の御
 忍ふ殿ハ旅のあまきまら子む
 ゆきく子揚し様ゆきまの
 青 青 青 青 青 青 青 青 青 青

唐人もみの月をくく丸や
 古文書空書のつぎ
 酒のまなはけ起て白雲飛
 ち初たかーや人のこさ
 新のよまは杖の大木大間屋
 法とくくえく多のあまら
 秤より日本の新をわやけぬん
 所く様のみをこつめぬ
 花手くくと禁の里ハ十園子
 白坂くゆきハ峰のさく
 青 青 青 青 青 青 青 青 青 青

同年春

梅の風 何故あけさうんあけ
 こらとくつ けりけり 春
 さわたりす 雲のきぬの袖ええ了
 けんや〜〜 ぬ心の〜けお
 き〜〜に 中ける方お〜〜
 う〜〜地ぬ ち〜〜お〜〜け〜〜き
 海〜〜〜 ち〜〜の ち〜〜月す〜〜
 趣 向〜〜〜 船の ち〜〜方
 け〜〜〜 過〜〜〜 ち〜〜え〜〜の 秋の 風
 雲〜〜〜 去 用し けり 羽衣
 う〜〜〜 蝶〜〜〜 ち〜〜の ち〜〜 ち〜〜
 音 嵐 ち〜〜〜 ち〜〜よ ぎ〜〜 ち〜〜

信章

柳青

松敷の 木 下 院 ち〜〜あれ
 雀 擔 桶 ち〜〜 村 雨 の ち〜
 夕 陽 ち〜〜 ち〜〜 ち〜〜 ち〜
 老 子 の ち〜〜 山 の 端 ち〜〜
 富 室 の ち〜〜 の ち〜〜 ち〜
 桐 壺 ち〜〜 木 ち〜〜 ち〜
 瑠 の ち〜〜 ち〜〜 ち〜
 汀 ち〜〜 外 ち〜〜 月
 古 里 の ち〜〜 ち〜
 志 賀 山 の ち〜〜 ち〜
 ち〜〜 ち〜〜 ち〜
 ち〜〜 ち〜〜 ち〜

河の流るる池のうらむる石の
 玉子のあやうらむる洗
 傳ゆる石のうらむるか
 上碧のうらむる木
 付とけのうらむる
 親類のうらむる
 寺中よ大なるゆれ八所人あり
 柳のうらむる
 古帳のうらむる
 火鉢のうらむる
 うらのうらむる
 河童子のうらむる

寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺

地獄のうらむる
 飛鳥のうらむる
 鳥子のうらむる
 釣籠のうらむる
 飛ハらむる
 志のうらむる
 白むる
 田舎のうらむる
 ぬるのうらむる
 床のうらむる
 虎の毛のうらむる

寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺

くらりこのの海地の角をいふん
 三 字もえあつる秦の法くそ
 勢子もみ徐福の似もあつる
 三 字の意はく乾神の外
 瀬戸の土を輪流を好むぬま
 弁才天より鮫さくくお
 可月ほろ口流あつぬ海くのも
 その夜の不二千足抄の山
 かんふ層はく山くもさうさ
 足よく成佛くそふさぬの法
 龍井佛府を中くおの月
 龍田のあま豆腐四五丁

寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺

町つお南のたをくく山の二をさ
 人衆の悉くはさくくあつ
 大火事をも袖けくあつあつ
 三 字くくあつあつあつあつ
 三 日本橋らんくあつあつあつ
 方く足をもくあつあつあつ
 三 かつあつあつあつあつあつ
 三 信くあつあつあつあつあつ
 何とくあつあつあつあつあつ
 三 中掃くあつあつあつあつあつ
 三 保町の土を焚くあつあつ

寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺

晴つきの坊主も秋やさしくん
 手一休り尺をさるわの月
 花の心も朱鞘をこぼさ夕可
 川やきつた岸の山もさ
 二
 せし川もささくささくさ
 残葉もささくささくさ
 風もく物枝もささくさ
 秋の節もささくささくさ
 双六の書もささくささくさ
 宿舎の秋もささくささくさ
 月の光もささくささくさ
 かく風流もささくささくさ

寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺

小童園子大郎のうみ鏡取
 弦の飯椀湯とささくさ
 一二秋法もささくささくさ
 月ハおしりの親仁友ささくさ
 巻もささくささくささくさ
 胸の鼻用のささくささくさ
 三
 縁度もささくささくささくさ
 手もささくささくささくさ
 所もささくささくささくさ
 古もささくささくささくさ
 境もささくささくささくさ
 文もささくささくささくさ

寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺

今り子新様定とてまくとふ
物もあつてはるものわくとわ
ゆの時八雲の二階に追うる
何ぞとて曰ハ猫の目の
月影や星の琥珀の曇る
霞えらりるるつて可
法のをる良めら非節あ
名跡の原とて一とて
三
上といふ越のまゝ山
百景石は梅のほふ
早し梅々の帯は
守随極の委は撰集

法 亭 亭 法 亭 亭 法 亭 亭 法 亭 亭

掛念も小河のついでといふ
ら花あつて朽木の枝に
小物あつて一廊の
あつて入るは
海苔やまの山
さつ柴人の
蹴り
うたつて
飛の
森の
二
三

法 亭 亭 法 亭 亭 法 亭 亭 法 亭 亭

茶代の古名買しと呼ぶあり
 蟹舟多しれゆりゆり 羽衣
 田子の浦波うらやまうらやま 履持妻
 不そ尾うらやま 阿戸の船舟
 赤八海入りやま 洗ふらうらやま 疵
 松の根まらうらやま 石の強とら
 清く建とや心女の恥多し 赤毛とら
 尾燈の燈うらやま 舟の月
 赤毛を荒のいふらうらやま 秋
 涙をみらうらやま 雲よりゆりゆり 舟
 衣袋 狂の海うらやま 舟の舟
 舟いもうらやま 舟の白 舟

名
 路の古一巻二百巻とけり
 氏の高ハさゆふめつハま久山
 舟の命のたふり定て舟よりし
 幽霊と来る海客のふぬすみ
 舟縁さの橋の上うらやま 舟
 舟合 舟の舟 舟の舟
 祖父祖母とやおとす舟若くとも
 被をいし舟子 龍走舟人とも
 米袋の舟と舟と 舟の舟
 木袋の舟と舟と 舟の舟
 舟の舟と舟と 舟の舟
 舟の舟と舟と 舟の舟
 舟の舟と舟と 舟の舟

ささきとふ追ふ鳥や波の月
 すい信人の芦の穂の音
 物の残振あふするま体
 木環子の尾山の端の音
 人秋の湫のこころの所
 くらげの干かゝるま体
 比箱葉のふもすらすら七度
 位りー活白砂の海
 浅海深かゝるの魚の音
 神代以来おむ入の音
 草 体 草 体 草 体 草 体 草 体

近世六戊午春

さそれ初澄琉璃小糸の花
 りよみとくに花の人 秋
 青の面影ふ山より暮るる
 かゝるけの滝の音の心
 ありとらるる浪の音の舟
 舟よまきとる友の音
 又百のまきとる友の音
 松を神探りれ音の秋
 手うけの音の音の音
 思ひのま川ふたえの音
 木環の音の音の音
 門の音の音の音
 草 体 草 体 草 体 草 体 草 体 草 体 草 体 草 体

信章

竹徳

柳青

草

体

草

体

草

体

草

体

草

鹽田屋進退ちあをたのめられて
 二人の若女浪人小姓
 牛子千らきれうとよけを足
 流しけわつしけ残さうの母衣
 心をあめさのほくあををハ
 浪せき入る大倉の洞
 首隠津地獄の底くさうはら
 珍扶解のあひと碎くる
 酒の月は妻あきのゆ振あ
 隙の内俊お言のあか
 肩を取袖ささうする花
 中風もそハ世帯一持あう

寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺

瑞の尻入りの以り身をけさ
 のり屋のくしと鴨の写しお
 山うけの精進あそねのあ
 三十三寺秋たてし 虎
 子帳や後成仇のあうけ
 宇量法外小僧新者意
 いらは旗柱と山とあうく
 ちをを増福うけの白障秋
 新しうく長月法の本根あ
 時のあまねおしうし給一板
 空昇りくき無くくくく味あや
 まういふは母縁のめけう

寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺

三
 侍をくも人しつゝとては
 急鬼とあそびあはれ
 正之のまはれとては
 こゝに花をさうくは
 あはれ東叡山の天
 花のさうくは所中
 青梅の敷ゆいし
 高景子あつた
 まさしつゝとては
 先童のあつた
 恋のまはれ
 侍をくも人しつゝとては

寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺

三
 心中の山林竹木
 末寺の宿屋
 十才の和尚
 疎院の和尚
 堂の和尚
 こゝの和尚
 若くは和尚
 うき中
 志多の和尚
 頼了僧正

寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺

若宮のついでに流石の八雲を即
 かつすすのついでに右近をすん
 其の月橋の精所をすん
 すも山も志留成佛
 又性の眼の光り陽の輝
 藤穂の光り因果すん
 志留のついでに十景目とこ
 大八や志留の山守の思ふん
 日産をめぐりついでに松
 山麓の柿 輝子尾をけ
 青の雪の目白羽のまをけ

寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺

言の葉のついでに本宮のついでに
 よくのついでに谷津を月
 山をくついでに舟橋をすん
 山守のついでに標石を
 白のついでに花のついでに
 名 魁 殿 中 の 物 い と 子 喜
 延 坂 の 中 台 の ついでに
 山をくついでに山守のついでに
 舟子飛 雲をすん
 松のついでに松をすん
 右物のついでに松をすん
 楚のついでに松をすん

寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺

邯鄲の里の野花は月明く
 よくしゆゆの舎をを飛ぶ
 子句よよ十萬俊も鼻の先
 系おろしゆゆのち武著の蔭
 音楽のゆる三味除ぬいの心
 四折さハく牛のちの流
 姉妹の佛依は丘尼のゆも
 浮かそそゆゆの佛もゆも
 ゆつぎ一黄金の膚もゆも
 小糖みゆゆの草袋もゆも
 旅杖ゆゆのやきゆゆん
 鯛ゆゆのちきゆゆ焼ゆゆ

寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺

ともゆきゆゆはくしゆゆ情
 迷理ゆゆの若ゆゆのゆゆを持ゆ
 空や花白ゆゆゆゆ焼ゆゆゆ
 店ちゆゆ帰ゆゆの羽第ゆゆの原

寺 寺 寺 寺 寺 寺

同年春

物のゆゆも増や古郷のゆゆのゆゆ
 作ゆゆのちゆゆ百餘里ゆゆ喜
 峰ゆゆのちゆゆのちゆゆのちゆゆ
 子人力のゆゆのちゆゆのちゆゆ
 態つゆゆのちゆゆのちゆゆのちゆゆ
 有右をゆゆのちゆゆのちゆゆ

寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺

信徳

桃青

信章

信

青

寺

約とめくから結おし〜くさのさ
 東坡の木の木の木の木の木の
 共里く石すりの文のよひひひ
 服子の海木残魚のさうさう
 去用志れ山を踏破の青何し
 谷うらな〜え〜美研の〜
 吹矢をたお〜思〜海舟月
 秋の志疎のささな〜や〜ねえ
 まゆ虫鈴お〜曹ら〜
 志子をとま〜き〜ま〜
 氏業平の情人や〜さ〜

春 春 春 春 春 春 春 春 春 春 春

本城色は秋名響〜
 ひんや〜秋名響〜
 物や〜し〜
 松江の海はあ店〜
 め〜桶〜
 半月白〜
 花〜
 父大信の〜
 子花〜
 笑の〜
 小男麻の〜
 儀の〜

春 春 春 春 春 春 春 春 春 春 春

園下の掃子家より子母家
 火付の巻より從心くん
 本三位源子と張るるくく
 貞の巻や館おこりあ
 かこく可子龍波の梅は兄弟
 巻より巻 新巻の巻
 子龍のくく 陶の求ぬをめ
 信能きりつ巻す橋より水
 駒のくく 中の言は子引く
 巻より巻より 神より巻より
 買うる巻はぬ源巻を付く
 川の大き巻より巻一巻

巻 巻 巻 巻 巻 巻 巻 巻 巻 巻 巻 巻

巻は巻の三巻 振甲巻より巻
 巻巻 やくく や巻は破くく
 小巻めくく 枝はた巻くく
 減巻めくく 巻くく 巻巻
 子巻巻 木くく 巻くく 巻
 巻くく 巻くく 巻くく 巻
 巻の文巻 一分も巻くく 巻
 巻めくく 巻くく 巻の巻
 巻や巻くく 二代目の巻巻めくく
 巻くく 巻巻 巻 巻
 巻の枝巻 巻くく 巻くく
 巻くく 巻は巻人巻 巻草

巻 巻 巻 巻 巻 巻 巻 巻 巻 巻 巻 巻

名
 喜ぶ事なきは女まじりす物納
 扱子ハうけり足ぬらつとく
 良志伸し下女ししの我ひ子
 赤赤しれの旗もあひうす
 酒梅子引算の一句志矢され
 情以ハ人そは くら
 妻之より身破れく言も好し
 母より母終う未ぬ衣敷捨
 君こく瓜の先おとこいぬ
 志のふくこくおすくろ志とく
 意弱し内親王おはしと紫
 乳母走く物くハ志うの揃
 法 寺 法 寺 法 寺 法 寺 法 寺 法 寺

疵瘡の神思神あつても運の月
 ましつや面を張豊のあ
 弱き布の衣器とひくく
 松をいく代の喜破在あつ
 水邊の衣をも風子もあれハ
 くれうはも淡し一子あ
 火雷にらも踏々ひくく
 若 丞 おと 本所 の 末
 江戸の赤心正義の末の叶とや
 法 寺 法 寺 法 寺 法 寺 法 寺 法 寺

同年秋

於四友亭無行

仙春

次廣そ秋志賀を良儀見でと是ハ
わの () の海さーそく月
沖の石玉座、神の香方とれて
足きくれそやるの雪すお
山おろしー小笠のうけさるこ
走くもくろらふまふあめく
甜海食、あまかりー、様さく
禁をさあれたらめゆく
めくく人ー三笠のまやあかん
火付けの跡やーくくくく
子難の風公儀ーくくくく

四友
柳青
喜
喜
喜
喜
喜
喜
喜
喜
喜
喜
喜

師高老うら白髪、の形
多波中歌手はむきふとや
洲崎の松れはくく狂
てくちく言砂の松れを思ふ
波の多あり、撮うううむ
又やまの海屋門あれ物中
南約四百八十日 朱
芽中山くくく武吉のせうく
浪くく岩をきくくこのく
花の海舟の松れあれ付く
喜柳くくく女府あれつ
血のそきくくみ幾々のまの

喜
喜
喜
喜
喜
喜
喜
喜
喜
喜
喜
喜
喜

胸のうしろにさうりる葉
船のしをちりおほくさる葉
時雨のねむれけをよふ
お花散りてまらぬさうり
富きの月ひそくさうり
枝のやぶらぐはく秋の風
芦の丸居りてさうり
浦のうらみれく海に浪のね
さくかの磯手はあつたや
甲斐の根や吹雪の幕ふ入
日上人は新てさうり
尾端の大もぬ露の山吹文

非代の葉まらさうり
ゆめれハ葉系との勢は
風は 葉のぬれぬ葉
お使ひりとも秋の葉あふ
二百何となく又葉の
たの月やうさく葉をさ
既りよさうり合戦は
さうりさうりさうり
さうりさうりさうり
冷食を思ひさうり
是生滅法生葉の
か極のさうりさうり

冥ふ子やうふそハ残燭と
口情の花は夢うやめく左印
ふくまてと野を物さう山吹
ひまんと志家出ううてや啼一燈
あふふくく一に道波の面
お情子ゆゆのほほの本まういそ
根あふあつておうの信人
長敷のちあふう雲あふ村人とハ
業らういひう風さうさうさ
幾月の少ねさうさうや陸中さん
とくとも若根あふ下女さうさ
残情あふ海さうのれもたさぬあふ

心あふ子情を想てさうみさう
美名 洲の旗子さうおあて
やう引うゆく星あううい波
わとく(と天の戸ほそのさうの月
三市をさう粉さうさう 秋
三三 珠あふと河系ほさう詠田川
ふと時あさうさう新木のあ
浮もとのさあさうさうさう 里
多氣をもさうさう他境さう入
あをも柳打拵やあぬさうん
官あさうやさうさう杖とさう履と
志あさうさう旗はさうのれお門あさう

衣を肩子うしめ仕合
酒子白雲帯を髪をしり
秋風起てわらうと
摩遠をゆのさそひ忽ち
尾を引すうて森のふき
御神舞別花ハ花よ
つ〜し〜と〜の〜を〜花り
持けし〜つ〜の玉子かひと
うらた〜と〜度〜玉のか〜と
雪降る伊らぬ陽柳とあざし
ふみ石ぬら井ハ十と
山修り現るあうひ花と

喜
喜
喜
喜
喜
喜
喜
喜
喜
喜
喜
喜
喜
喜

言るは西河といはやくは
物おを都の西子年一つ
五月の陽は古を法りとも
友園の二珠一足やあ〜ん
言へ舞 おしと疎ゆりきり
秋の二輪見火入をさけり
膝子の袖子月をさるる
思ひぬれお方の姿を一つ
空峰眼をく〜とく〜と
肩情う〜と〜と〜と
思ふ〜と〜と〜と〜と

喜
喜
喜
喜
喜
喜
喜
喜
喜
喜
喜
喜
喜
喜

長老のこゝろを思ふにありしは
 徳善なるみねの路やいづこ
 宿もの可くもをりたまはす
 花のまをて張山をよみ侍
 宗生のこゝろよふもふも
 白砂の旗をまゝにこゝろを
 みどを軒端をりやめあはく
 寺のまへに定家あはれ侍
 曾之の存のまゝにありし
 八百手佛燈の光を文に
 狸のこゝろをりやめあはく
 狼や香をりやめあはく

後 等 ぐ 倍 正 谷
 一室峰岩千跡の左刀の伝
 今 之 水 ぐ 波 の 激 々 情
 々 々 々 々 々 切 妻 ぐ 花 ち ち
 溪 の 似 々 々 々 山 竹 の 一 村
 孤 を 挽 ぐ 留 ぐ 一 經 系 の
 みの 経 の 胸 の 大 ぐ 侍 忠 々 々
 之 々 々 々 々 々 長 持 神 一 々 々
 け 々 々 々 人 を ぐ 物 々 々 々 々
 路 の 数 々 々 々 盛 隆 々 々 々 々 々
 研 哉 勝 々 々 々 々 々 々 々 々 々
 お 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々

親仁其況法めハきく修
 系小紋の羽折ハ星子海の
 此らきしれ縮の夕神の入
 管絃を本情の舞やさし
 字露ハ所れとも毛兎を
 緋の骨のしるし里の月
 又まけし巻し丸山の色
 片菱盤初の赤花ちて
 うすみの百さう結ハ
 三 之まやあ掛付きと内子
 段引 御守きと娘
 情けうをさくさくあハ
 喜 喜 喜 喜 喜 喜 喜 喜 喜 喜 喜

清く 兵 舎 大 松
 世のあたるをいけんや
 茶のうハ未未おまは
 因来笑舞の血をま
 善 男 吾 伊 後 とも
 又 彦 子 孔 子 字 ハ 太 二 郎
 此 子 取 ち 心 中 彦 子 中 一 何 とも
 不 心 中 彦 子 中 一 何 とも
 君 々 唯 爾 余 不 可 何 とも
 去 不 秋 不 秋 不 秋 不 秋
 秋 不 秋 不 秋 不 秋 不 秋
 寂 滅 の 貝 子 不 可 何 とも
 喜 喜 喜 喜 喜 喜 喜 喜 喜 喜 喜

石の川ぬきふる山本の雪
大地を凍つてはく龍やの海にむ
長十丈は鮫みりくく
かへほとの橋板をくたす
魚舟漁り多し系包丁
ぬれ梅や少きぬれは塩は
新糖にほれく対面おきん
古き伊勢の山おきん
河内ハ車おきん北秋風
さくれては飯匙はほく油の香
魚を溜りくく胸くくす月
行舟のさす姿急花おきん

名 喜 半 一 一 瓜 瓜 ハ
新 是 其 怪 象 多 子 子 子 子 子
代 八 車 海 幸 ぬ っ っ っ
何 ぶ ず ず 係 の 与 之 印 大 脚 々
たりけ 狂いおきん 中 軍 一 一
口 舌 子 々 古 後 折 々 係 一 一
る 子 の 一 一 一 一 赤 心 子 一 一
そ 子 一 一 一 一 一 一 一 一 一
急 子 別 々 粒 一 一 一 一 一 一
る 子 一 一 一 一 一 一 一 一 一
蹴 部 校 多 々 泰 々 一 一 一 一
我 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一

けんどおききまや山の端は
 小舟の葉子溜の月と月
 展平沈む新雪の
 寒風も山を渡るからわく
 かくくくお下お下お下
 片ハあやうふ人形は風も
 海士のきりーハ新のこくくに
 何れも野共火よりくくく
 八尋豆腐もくもあ
 面影はねろー大根花
 あくく陰子子くくく月

喜 喜 喜 喜 喜 喜 喜 喜 喜 喜

同季秋

のまれくく秋の大音江戸の秋
 細のかくくも今月 月
 菊やとのあやうくき原中
 酒舟は燈ハ灯 浪 こそす
 確のわくくくくハ松の片
 与彼りやまのくく仙境入
 くくくくくの上まき
 いつとも 神 喜 喜
 沙町くくくお婆ハ
 何れも行進は夕暮り
 ちりくくくくくくくく

似春 柳青 喜 喜 喜 喜 喜 喜 喜 喜 喜 喜

春燈

舞かきしるひはけのうらな
 お作ししは徳のやうの徳のやう
 被のふまきそ寺の植は
 小きくは色も大まかの思ふ
 鬼くくくすも生捕りて
 天も花も毒も破れ力も新
 飯のころはれまきもあつた
 ありあむ猫ハ都く神々し
 廻つひのいりまはもえあん
 瓶のやうな名もあや草はれん
 金輪際よりま由山のあ
 畏れ門は群のきくくくわの秋

喜 喜 喜 喜 喜 喜 喜 喜 喜 喜 喜 喜 喜 喜 喜 喜 喜 喜 喜 喜

かなはれ首のうらなつ月
 蒼舌をハツクわすけぬん
 去勢文より素のわ
 草物右直り歌をきく
 古川のくくくをんや
 先ききくは二けんのかき
 日待りしきくくく
 やすくはれぬぬ目覚すまら
 ちのりりりりりりりりり
 肉焼くまはれぬぬや
 松ハすくくく入るお玉
 花ハ花袖ハ綿の長縮きく

喜 喜 喜 喜 喜 喜 喜 喜 喜 喜 喜 喜 喜 喜 喜 喜 喜 喜 喜 喜

帆子ハきむくくひ子の命

春

同

似春

春風吹くあまの空をゆく旅まきこ
舟をこぎしつゝの舟を走ら
秋杖子かきしるの秋清き
舟は肩をなぐつゝあり
系うきうき木まのめり秋の風
天下一歩目移るこころも
淀も舟を流の可けり尺八や
やよ都ら天幕のさき
黄くは不受不転くまぬ

春流 柳青 春 春 春 春 春

秋の風をよめ候くうし
あはれそよ風の秋まのま
出女お玉伝姫ハくれと
秋代とまきす百文の志
雲空の秋子子をみおみ
舟かハ帳は首ちまき
舟の中は儒者一人の舟にて
秋の風は舟をこぎしる
とらうし舟をこぎしる
舟の納め舟をこぎしる

春 春 春 春 春 春 春 春 春 春

小所、果此女方、とて
 悉新、詠ふまへ、あつても、あつても
 告、千、おの、を、て、い、識、り、い
 あ、結、縁、を、と、し、き、中、を、思、ふ、と
 秋、の、夜、を、手、後、了、き、ひ、き
 計、之、共、言、宿、傳、お、尺、ま、と、れ、る
 秋、を、し、ぬ、程、ハ、湯、山、此、月
 何、も、楊、枝、き、の、ふ、ハ、峰、の、首、の、紫
 四、五、又、は、い、と、の、香、一、と、い、ふ、ん
 又、何、の、け、ま、ハ、ち、よ、く、に、い、ふ、と、い、ふ、
 塔、の、う、い、は、し、仲、傳、き、と、い、は、し、
 竹、戸、棚、の、波、の、心、門、や、め、め、ん

春 春 春 春 春 春 春 春 春 春

漏、き、く、く、し、ま、に、い、の、泉
 山、の、川、の、さ、の、根、お、ろ、く、と、い、ふ、
 耳、せ、か、く、す、青、の、ま、柳

春 春 春

桃青

同
 吟、み、て、ま、さ、よ、う、と、い、ふ、お、ろ、
 出、く、の、は、ら、の、波、の、あ、ら、野
 川、流、の、杭、木、や、花、の、つ、と、い、ふ、
 子、幸、子、あ、る、ま、み、と、い、ふ、し
 又、と、い、ふ、い、の、あ、ら、う、と、い、ふ、
 音、の、吹、か、よ、う、山、の、秋、風
 子、の、す、す、の、足、と、い、ふ、
 春 春 春 春 春 春 春 春 春 春

納まよし 雲了ふと
海もや松の葉阿けき梅の
嵐 阿けゆくと海の又浪
於小舟米焼の泣きひき
花も籠もあふ生 けり
とめくればあしき女は報神
大海とくひはそく 雲
一夜の月合の如くをさきて
ばらちりあうり 小舟の角
数芝居ぬれしや袖の雨の
左のちきも右のちき 雲
麦飯の井や夏子雲あふ

春 春 春 春 春 春 春 春 春 春

妙ありののりやとらふのり
幽冥ハ残濤舟 一しんのか
さの休ハくさひき海子の浪
殺さうり今我ふやん 一つ
野天高くけり 雲とらん
帳印の志久をゆきあけ 雲
あつらふ 幸ハ石川 雲
まのあひきす 雲の若郎 雲
既子 石帯も 雲やあけ
舟の力様 阿さく 雲
ほたを おる 雲 雲
去男ののり 雲 雲

春 春 春 春 春 春 春 春 春 春

野の床を走るる一ひ
 庭のすげみくらふ一ひ
 ききくものまわ天のうへ山
 休は娘のよめうけふもあこ
 古菜子之う仲人のう

桃青

同

宮や内下は金子の通く町
 夏子数ふくぬ看板のう
 新葉麦也三田かられ子田おき
 芦の葉らゆり一れ味るる浪
 甚や柳新一小舟よふく

一ひ男一と名と市そのの
 糸ものをも光悦流るうれ
 菜草喻ふくさうく
 玄論の語地の奴もさ
 糸をくくすの年一緑青の山
 隈との峰より内のおうり
 秋を中布北庭の山風
 枝まの勢は中うまられ
 精をゆけれ三位入花
 かとわぬをいんりまうり
 又原をく陸子くさく
 堂はたわら金子をゆらふ

祇田のたぐに持交るる一
 毛體を佛門の目うを綿あし
 そらや霞裳露深草する
 破れ袈裟衣のかけは法衣とちよ
 籠りて羽の郭云 とうぶ
 押入や淀のさくく北窓階子
 織子の古し物衣室の森
 能く更まを針糸のねえこ
 版様うくゆくゆく一
 扇智とう根のさのまやうの
 姐板の月摺新の不二
 昔の秋三子節人の拂物
 二葉子
 紀子
 ト尺
 紀子
 柳青
 ト尺
 二葉子
 紀子
 ト尺
 二葉子

釋かともこのうを欠片の時
 叔母子精念のうをうつしに持
 大坂之川と毛のこけり
 祇田の火入とやい是とや
 鬼一口子物産を喰い 割
 花の時子方とい川一 若原こ
 志井とを子の五代のま
 柳青
 ト尺
 紀子
 柳青
 二葉子
 紀子
 ト尺

同七五未冬
 子春
 信徳
 荒巖味喰こし 岸侍の雪
 浪風の基を雪 舞うる河了

磯多紀衣おもくひけつ
嵐とくくはれも力の入るや
紙物けしきハ勢作し
所強しや一女、枕の初尾を
百歩のくさくたさ少れの種
仇し吾をかきこの釋迦の設きハ
あつひはてのら十太の羅漢
又男の姿かゝらハかゝるね
古の相好す、志そしつ
つくしと記念のや、を宿ま
路のくともぬさへきつりの家
預かへるれくや、の月の

青 青 青 青 青 青 青 青 青 青

や井了るる、原の、細き
料理人沙都をまき、若の浪
木氣屋の扇付の、まき、風
^二信吉のゆ干す、尺、ぬ小刀、紙
^一海の娘、松、繩、もの、ま、と、く
ま、ぐ、に、襦、袢、と、袖、を、使、つ、
枕、を、く、し、一、縹、ゆ、け、ゆ、果
端、と、つ、す、天、の、浮、き、し、中、路、で
経、の、白、お、う、し、張、を、く、し、ま、か
滑、川、の、ひ、の、艾、子、火、を、し、し、
都、宮、の、く、し、雨、帚、の、風
い、ま、き、く、し、利、久、と、い、し、し、法、沙、郎

青 青 青 青 青 青 青 青 青 青

秋の夜半の三節一々の月
 虫のあつたつたてふてふ
 いさこ長一々石摺の
 といふれれとては時をいふ
 園生のまゝ葉多し十四竹
 訓もやし 乞食の妹背ちる
 思ひ川塘離れ七々の
 七月やや稲荷の流つきま

春 春 春 春 春 春 春

同季春
夢想

きけく二内中旬節
 天不のあつたけあ
 面もあ古氣はく
 志らふ小嵐子
 中下くく葉以鳥
 谷の戸はくう
 上く青く
 子甲の羽も

秋 秋 秋 秋 秋 秋 秋

枕青 枕風 枕風 枕風 枕風 枕風 枕筆

同
 山を志るく
 樞のい

枕青
 枕風

道へ橋をさすも一も海へは
善信のつらうよふまの
親父の殿さしは新ハ川へ
さねハ多しけ彼岸へら
我月や赤州貴氣増え
子虎さひ一幕の下家
此力月善信のいももの
海ハこゝろけこねうね
番掛ハかかるといふ
四里のけり一舟の岩角
尺版をハもハさうれて
ねのふらう下帯もね

風 青 風 青 風 青 風 青 風 青 風 青

まこ柳の浪打波のよ安貝
瀬江塔屋の橋家のの底
破小舟削志けきそな
本城子うさるさ砂地の
そなやうに築きて底の
かきさる木石山の
味増すもさのき松の谷
三子せいの山や峰り若
つらね火妻の門や火
おのりお高の山や
見くもろさうたうた
寺の里橋も一らの

風 青 風 青 風 青 風 青 風 青 風 青

三
 常山や終古、胸中流るる
 羽第一と終ハ風まらるる
 直らまらるる竹の波
 夕白く浮行く袖海に映る
 小徳利のあかき酒と山や物も
 いらふくぬ松を碎とも火
 下るるまらるる足半牛の習
 幹水の桶おかしきまらるる
 上方のかく記まらるる使
 くるまらるるゆひまらるる様
 縁甘や二度うらまらるる
 若ともまらるるちやまらるる

風 春 風 春 風 春 風 春 風 春 風 春 風 春

三
 常山や終古、胸中流るる
 羽第一と終ハ風まらるる
 直らまらるる竹の波
 夕白く浮行く袖海に映る
 小徳利のあかき酒と山や物も
 いらふくぬ松を碎とも火
 下るるまらるる足半牛の習
 幹水の桶おかしきまらるる
 上方のかく記まらるる使
 くるまらるるゆひまらるる様
 縁甘や二度うらまらるる
 若ともまらるるちやまらるる

風 春 風 春 風 春 風 春 風 春 風 春 風 春

夜ふけ 海原の舟 神の舟
跡の舟 八雲の舟 子雲の舟 灰
花の舟 紫の舟 雪の舟 物と舟
古の舟 一花の舟 江の舟 文の舟
古の舟 八載の舟 舟の舟 舟の舟
舟の舟 舟の舟 舟の舟 舟の舟
舟の舟 舟の舟 舟の舟 舟の舟
舟の舟 舟の舟 舟の舟 舟の舟
舟の舟 舟の舟 舟の舟 舟の舟
舟の舟 舟の舟 舟の舟 舟の舟

風 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟

舟の舟 舟の舟 舟の舟 舟の舟
舟の舟 舟の舟 舟の舟 舟の舟
舟の舟 舟の舟 舟の舟 舟の舟
舟の舟 舟の舟 舟の舟 舟の舟
舟の舟 舟の舟 舟の舟 舟の舟
舟の舟 舟の舟 舟の舟 舟の舟
舟の舟 舟の舟 舟の舟 舟の舟
舟の舟 舟の舟 舟の舟 舟の舟
舟の舟 舟の舟 舟の舟 舟の舟
舟の舟 舟の舟 舟の舟 舟の舟
舟の舟 舟の舟 舟の舟 舟の舟
舟の舟 舟の舟 舟の舟 舟の舟
舟の舟 舟の舟 舟の舟 舟の舟
舟の舟 舟の舟 舟の舟 舟の舟
舟の舟 舟の舟 舟の舟 舟の舟

風 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟

折るくく新千世の花ハ
くわらのくくく山里の春
風

次韻 天和元年酉

表題

晋 伯倫傳 酒德頌 樂天 饒
酒功 續 青 追 續 信 德 七 百

五十韻

二百五十句

あまのりもなまこふまの花ふれと

三 又ささねののをももあまのく

体字の所 餅子 肝 去く 残るく

桃青

直	句	以	テ	莊	子	可	レ	見	ッ	矣	其	角
深	骨	の	カ	な	く	く	来	ま	り	に	才	磨
ま	く	く	く	ん	ね	ね	ね	ね	ね	ね	楊	水
骨	の	ま	く	い	ま	を	終	る	は	く	角	
神	心	く	ま	も	依	一	ま	ん	月	角		
微	面	ゆ	く	庵	く	山	の	木	官	く	水	
粟	く	稗	さ	く	春	く	く	の	守	角		
俊	才	め	画	眉	を	定	る	呼	ま	ん	角	
是	出	く	ま	り	一	つ	た	く	み	く	角	
本	の	く	此	乞	食	の	料	の	六	を	角	
先	祖	を	尺	一	く	わ	あ	の	衣	う	角	
地	を	く	く	幽	冥	を	考	え	ん	も	角	

言
 女ハ赤く子々やあそびしむ
 さ月ひく後ハ心くく恨
 くらけ猫ハ身を背けり
 家子宿る且易別易志
 乳子ハ穀ハ肉ハ葛ハ紫
 去秋を花ハ食ハ心ハ
 白魚を煮て食ハ餅器の
 實子ハ赤人似命を
 徳士提灯を枕ハ秋ハ
 女ハ赤く子々やあそびしむ

青 水 角 磨 水 角 磨 水 角 磨 水 角 磨 水 角 磨

血柳ハ赤を根ハ青ハ
 目柳ハ心ハ赤ハ青ハ
 天帝ハ目安を青ハ赤ハ
 桂ハ赤ハ青ハ赤ハ青ハ
 赤ハ青ハ赤ハ青ハ赤ハ
 秋ハ青ハ赤ハ青ハ赤ハ
 白キ親仁紅紫村ハ赤ハ
 泥ハ火紅紫ハ赤ハ青ハ
 師魚ハ赤ハ青ハ赤ハ青ハ
 安房ハ赤ハ青ハ赤ハ青ハ
 向後ハ赤ハ青ハ赤ハ青ハ

青 水 角 磨 水 角 磨 水 角 磨 水 角 磨 水 角 磨

柏杙子 初音は 魂鳥の 魄
 志人れ 彼子 仰る かり 夏水
 命を くらひ 可多 風、 委
 夕暮を 息り 控る 吐き 心
 民屋 何の 脈を せく 志
 吹心 木魚、 子れ 地、 味く
 寺、 寄わ くる 密波、 古是
 有尺 巻む 言解、 日向 晴く
 あゝれ くと 文、 世、 ねま けり
 従軍 小袖、 何、 子の 空ぬ
 物取 ぬく くる けり ぬ けり
 花、 思 怒^{カラ}神宮 此 春 持 あり

春 水 春 角 水 廣 角 春 廣 水 春

幣 子 榮 作 子 託 の 角

同

原 子 為 子 五 文 字 子 一 子
 春 池 子 子 子 子 子 子 子 子
 下、 子 子 子 子 子 子 子 子
 月を 未 子 子 子 子 子 子 子 子
 毎、 子 子 子 子 子 子 子 子
 秋 子 子 子 子 子 子 子 子
 以 子 子 子 子 子 子 子 子
 夕 子 子 子 子 子 子 子 子
 夜 監 子 子 子 子 子 子 子 子

水 春 角 廣 桃 青 楊 水 才 廣 其 角

初の念とわしく霜受りてはハ
 吐刺のさきく再の後之
 自の秋いみえうは且夕そ
 寄りてさうむ妹の首髪
 子のしきく鏡子と虫の跡るんよ
 終と極すうは無常の位
 小納すう木枕の布さうき記て
 納戸の神を肩一糸の
 煤掃之禮用於鯨之脯
 庭のいぬの箱置原ううう入
 風いにくまきわうあううに
 蒼瓦子うう好枯床をたぐ

椽と白骨の弦聚付てはう
 弓弓利利話もよう木長し
 椽小竹豆鼓う月の跡を割む
 骨を写うう芭蕉ううを風
 花のさめ物舞う羊を直きうこ
 椽子子籍をつううううう
 三 水市ううい息子ハ吉事の空を掃
 箕をううえううううううん
 布うううはうううの枝さき干さる
 山着跡を抱うううう
 忍ひさう人ハ地舞ううの色し
 木椽のうううう木爪の唇

洞窟より鬼灯の燈籠照し
踊 物衣此 裾子より河原
酒の月湯伽坊主の夕紫
去 素きうー やる美の泉水
河骨死草は流れをきやつ
浮あしうよりふくく 地火と化
築地河の根の底の車引
天火の闇の金銀の
三 坂江の磯ホ岸ホハ走く浪
青 海苔くくく 堀野と浮
花の蓮花芝子 堀野を賞
月より秋とふ 東金の傍

角 廣 水 青 角 廣 水 青 角 廣 水 青 角 廣

きりきり 浅草の夏より干す豆
夕うほやもく 夏花の
楓の木より 樹皮より
枕の信あり 美藁あり
軍のめを 向と 和魚より
糸一可 供を
出つゝも 蹴拵
泥付 清く 雨の火
字のれく 下妻より
名 秋の 里は 足跡
配 西人 若の 小忌部
河より 人 此 蘭 幸 堀を 枕と

廣 角 青 水 廣 角 水 廣 角 水 廣 角 水 廣 角 水

心はやむ朝に計さず生小舟
すはる尾力行を山一山走
麦早は豊の走くを豊く
勅使 草原の如く昔を
秋を早 物よもを速く
夏やきのあれは
津のふれ生田の森の初月夜
そさかしくけり乞食 場
寺のいこまはく里は 齋配
寺の納豆の煮る所 文
よこのねお梅花の甲の光を
朱炭 花よこ小舟 物

角 水 磨 水 角 水 磨 水 角 水 磨 水 角 水 磨 水

膳をそは小瓶の清き氣と
花みよくはる牛迹 一
竹の戸を人よ川に女のお梅を
おそ 孫子くくまこくよ
海のみすまん 一
ふとををそくくくあは 河木
多休のくす就花の甲の光を
如泉は 河の 喜 力 巧

角 水 磨 水 角 水 磨 水 角 水 磨 水

同
寺のあくさ泉のハ秋の砂舟
路もくく力 一 株 花を 買

才磨 楊水

風おの角均くぬも怪るる
 入の山ふみ根子一のり
 雷の斧丁こくさるる文子
 言く又言——就段の玉
 俗のふ麻島の出た庭ふり
 節のりお東ち地赤堀
 何を受て捨ふ物く官尺くら
 ひそのくくとお薬をとる
 有と藁又草の葉け片斬湯
 栗うりおて茎子干つる
 雲籠の卵の心の敷ひく
 ぬ返起る帯一帯ぬぬ

角 水 角 水 角 水 角 水 角 水 角 水 角 水 角 水

釜うぶる人ハ志のひくふり
 穂もさるるだくちの 木
 古家の後あり園子さく女籠ハ
 いちらのほろろ風山何ら子依
 麻の葉子生る小餅をおまて
 ろく枝ささあらし生ぬ袖袖子
 きくれく了清味くすむ有子
 ゆき霜葉をとり後まおん
 屋骨の食くほくはみさる
 人死を待くおむるのふり
 石か曰るめくく吹くく
 木ありくさるる風をぬ

角 水 角 水 角 水 角 水 角 水 角 水 角 水 角 水 角 水

三
飛雨基ノ法ハ意ニカレキツ
強了ノ進ニサル新キラクレ
大根の夢越の関のこゝろ
おとろくや大福の姫の縁
ろくろく一床一扇引つ
五やしと入るこゝろに
通す首の法はたすむ
かみひしれ根のよめけ縁
枝をふし今法一そく
こゝろ有る村風とす之味縁を
優一やしき法とす

角 水 角 水 角 水 角 水 角 水 角 水 角 水 角 水

秋の雲後切多きこゝろ
任持ゆきしこゝろ
三
葉一ろくそく
海老のこゝろ
急崎の松、根お花の基
きくき子、秋の雲の
ト向し法とす
地ノ雲とす子ノ根
毎法を空居る候り
法とす
川と法とす
志尼、秋の法

角 水 角 水 角 水 角 水 角 水 角 水 角 水 角 水 角 水 角 水

名
去 錦子 松子 拾ひ 子つ びり
ふ 里子 麻 ね 紙 引 入
松 茸 子 花 一 丈 之 小 枯 び
梁 の 梅 子 玉 梅 の い 可
綾 電 子 巻 の 巻 を 忍 び 子 ち
足 袋 さ ず 一 丈 之 風 巻 を ち
扇 ね 女 八 丈 子 拾 へ 巻 へ
丈 八 江 子 一 丈 之 巻 へ
初 子 一 歩 さ ず 一 丈 之 後 子 ち
巻 子 一 歩 さ ず 一 丈 之 後 子 ち
初 子 一 歩 さ ず 一 丈 之 後 子 ち
初 子 一 歩 さ ず 一 丈 之 後 子 ち
初 子 一 歩 さ ず 一 丈 之 後 子 ち

角 水 磨 青 水 磨 青 水 磨 青 水 磨 青 水 磨 青

去 錦子 松子 拾ひ 子つ びり
ふ 里子 麻 ね 紙 引 入
松 茸 子 花 一 丈 之 小 枯 び
梁 の 梅 子 玉 梅 の い 可
綾 電 子 巻 の 巻 を 忍 び 子 ち
足 袋 さ ず 一 丈 之 風 巻 を ち
扇 ね 女 八 丈 子 拾 へ 巻 へ
丈 八 江 子 一 丈 之 巻 へ
初 子 一 歩 さ ず 一 丈 之 後 子 ち
巻 子 一 歩 さ ず 一 丈 之 後 子 ち
初 子 一 歩 さ ず 一 丈 之 後 子 ち
初 子 一 歩 さ ず 一 丈 之 後 子 ち
初 子 一 歩 さ ず 一 丈 之 後 子 ち

角 水 磨 青 水 磨 青 水 磨 青 水 磨 青 水 磨 青

初雪の香に花をのりて
瓶に碎りて醗酵する
角

同 餅餌

附贅の枝を之に不茶
夜に鳥の羽をのりて
才丸 其角

楊水

天和壬戌春

瑞々たる花をのりて
山子丸 才丸

康城

風を吹く三弦の代をやくけり
雨双六の雷をわする
宵つらさの露の凍を退けけり
せんしとららの雪と月を返
空方うらく空や海やの波を畫す
梓桐の文書を北の
孤村の文書を恨む
燐酒旗の文書を
瓶に碎りて醗酵する
袖挿す
小海志爪白母を
尺子

十五

情さる海の望ももまやう
 於杭の精を以てたてり
 舟御坊卒お海を言の字
 ハ夢の有りなきを揮く
 味も精も自ら家法をねの戸ハ
 泣く邦のくく女の小女
 為立ち花訓約の尺入し海
 於杖の地をきくくろき
 功片の形をさしけり
 跡寫り系り佛界り飛
 夢の代ハ隅の所と我ハ
 新物字く玉出り一樓

暁 盡 角 言 昨 似 子 樹 曉 角 道

去浪清く海隅の志瓜子陽をし
 故の春を遺り血を少くおれん
 ねり解儀の漏る枯立り
 槐のうくくまにけり尺く物
 自さる春を海を實ととら
 狂吟喜れ海をひそめく
 風文破戸夫つらうる青遠く
 澄の穂子解る山けけ
 赤の玉急流中二帯り夕月歌
 猶れくくく花のさハ
 海さう海り扇まらり扇
 義士の愛もなきかきえり

堂 尺 似 道 子 樹 曉 堂 道

此處の船波の小は後多航也
紀の舟伊勢舟尾張船
波ハ白浪きくあみくも又和り
碧情千し瘠えをくく
々宵手志志は夢を中夢ふん
柳々枝千し水色はくさくさ
危殆存概りかられてはあふ
いゝゝぬ後先心驚き夏加日能
夢ささるる院千し竹を借られ
かきりあひかた権國舟をさへん
此れ舟觸を花くおしきく
皆空のみ葉くく楪のた

角空堂道子尺吹角曉堂 附似

三

古寺の月の之千りの月くし
空のくく心身を杖つく
山を好くく羽あけくや君あふ
船の笛名ありくく 仲
きく入玉嵐の流雪の洞
りを影くくく不二の株上
松葉の社父草よといふ如く
味全くく霊の密柑 秋スル
成トく火ゆくの能生きく
松小口此吼ぬけく
寺於古く世旅の松く居を朽
かすすの衣 堤くくく

堂角曉 噴水 嵐堂 附 道 子 尺 吹 角 曉 堂 附 似

消ゆる子摺の幕の夕方のけ
火張のけの一二寸ほど
何もの流ぬけたる花のけ
に戸下と上砂ふまのけ

目

まのまのきり香を隠したる心
美子ぬきし酒酒お
露の紫子酒酒行れお酒
弦あふお酒酒ととととととと
面はふ酒の酒酒酒酒酒酒酒
さうととととととととととと

せき

康附
一品

きささささささささささ
後家ゆ美雨の翠の酒のけから
かささささささささささ
文ささささささささささ
何ささささささささささ
一箇の酒酒酒酒酒酒酒酒
不煮さささささささささ
ささ風酒酒酒酒酒酒酒酒
さささささささささささ
味茶末也もさささささ
花酒酒酒酒酒酒酒酒酒酒
甚尾の酒酒酒酒酒酒酒酒

陽方の具原屋に作りの大工
 婿と嫁の百手よ 粟
 左のよしよは若の袖を引
 様々の故に清く留るれ
 血の流る甲も初めのけ屋
 餅をおくらの大寺よ 俵
 長史ふく乞食ハ家の榮竹
 子あをふとく牛菜の葉
 崩すく願ハ又多れ媚をう
 古佛一の殿に故をく月
 糸をくくれ若山伏の袖めれた
 俵白雪の后ころ ころ

けきりや牡丹の屋の如く火子
 白雲袖躍りや免 梨 花
 赤江免了己輝くく雨海に
 又新長若且まのくん
 丸の火焔に若を花を煉
 序をききや友の文橋

同
 故竹垣穂十木瓜も骨も赤うぬ
 笠おもくくやおの空むく雨
 花はくく雪に梅を掛くん
 市子小空をきふ 新 月

栗樹
 一目眺
 芭蕉
 樹

良字の庵、少油を打可けり
紅白の菊、ゆき其を採
新ふら卯塔、西のりそく
今人、稼を可くして、
楊弓北、及天、海、
上、字、の、部、と、つ、ま、子、三、線
く、た、玉、の、様、を、結、み、彩、り
密、丈、一、船、よ、い、め、ら、つ、た、ま、
新、の、屋、の、ら、み、の、ゆ、き、起、ま、
く、く、と、舞、ま、い、草、の、ゆ、き、
母、の、親、子、の、ま、い、の、月、を、
く、く、と、た、ま、い、ぬ、め、を、
く、く、と、た、ま、い、ぬ、め、を、

晶 葉 樹 晶 葉 樹 晶 葉 樹 晶 葉 樹

通、相、半、の、踏、音、を、
梅、火、清、く、
喜、風、の、他、手、
か、く、す、ハ、
院、の、ゆ、き、
青、の、葉、
風、の、縮、
内、野、を、
新、し、き、
春、を、
お、金、を、
飛、姫、も、

晶 葉 樹 晶 葉 樹 晶 葉 樹 晶 葉 樹

十一年の二十一年を志の九十九
 室のくくく念佛 七をく
 蓮生を火を消 狐末をくく
 智故らるを 畫をく 行 数
 高古此 鷲おく 海を 買をく
 松く 築をく 幅 端の 子 代
 佛 法 の 穴 空 花 の 浮 狂 人
 了 跡 一 被 おく 喜 狂 人

晶 燭 魚 晶 燭 魚 晶

て和之屋亥年

花くくく 五系 海 志 へく 食 玉 了
 所くくく 巻 玉 一 陽 片 の 瘦

芭蕉

一品

朝 陽 一 玉 海 志 へく 食 玉 了
 浪 人 の 志 玉 一 玉 海 志 へく 食 玉 了
 や 子 の 一 玉 一 玉 海 志 へく 食 玉 了
 高 古 此 鷲 おく 海 を 買 を く
 有 ハ 退 之 肝 祝 を 奪 け
 雷 玉 の 初 玉 一 玉 海 志 へく 食 玉 了
 夕 照 一 玉 一 玉 海 志 へく 食 玉 了

晶 燭 魚 晶 燭 魚 晶 燭 魚 晶

其情の張る 結し 那代より
用織り 角とく 風松極
河し 池の 枯をわく 子の月
破道 淫つ け 侍の上を 次
射解 子 両 瓜を 踏つ ぐる こと
つ け け け け け け け け け け
欠つ け け け け け け け け け け
吾ハ 私 け け け け け け け け け け
松入 ぬ 氣ハ 六 十の 荆 け け け け
け け け け け け け け け け け け
人の 情 け け け け け け け け け け
松 け け け け け け け け け け け

晶 角 景 雪 晶 魚 雪 景 角 晶

き け け け け け け け け け け
山 野 子 け け け け け け け け け け
空 井の け け け け け け け け け け
木 城ハ 武 士の 情 け け け け
尺 け け け け け け け け け け け
名 け け け け け け け け け け け
曉 け け け け け け け け け け け
路 け け け け け け け け け け け
花 け け け け け け け け け け け
柳 け け け け け け け け け け け

角 景 雪 晶 角 景 雪 晶 角 景

同

枯葉雙葉螺の角を煮て丸ん
 鹿神を使つて蕨海のまを
 鐵のろを取らけきやうやう
 虎 煉り 姫の阿のりき
 二重く四陸の床を火あじ
 押火溜る指のまも一火
 下目后糸をねる月を牙
 西瓜を練りつてふりあしく
 名いの上葉煉りかゆい吹鳴る
 みられくの東一ぬ石 向
 武士の澄の丸の角 煉りす
 八重の約ねを煮て丸ん

角 角 角 角 角 角 角 角 角 角

竹あきんと花を食ふ海徒外 是
 春一湖 日暮ヲ 駕無吟 角

同

一事二百六十日

海口の吹雪三日

鏡や々事やしく向け書きと
 女をきく浪や大根く舟 女角
 月をきく草の海を枯つらん
 くららきく書を上みゆき
 百もすねと秋をゆくまへし
 傾婦を葉の帯をくまへし 角

李下

敵阿の海の色を写す月州
然りて下一音の敵
又青れ金持ハ素をまつて
みえとく) 船とつち善ふ
世にも志のほろとあかひ
士峰のやを空むか賀殿
松百と玉千子曳の流る
名もくらかさし黒木串柳
此世の花火の男内ゆり
まゝ月来とくつ河心の家
月を写す生憎のうれ上戸也
是も志らくくむささ新海

角 下 角 下 角 下 角 下 角 下 角 下

新う海を是素の種を植るん
院のほ家のゆりふふふ
却をや高京少社を思ひわ
仕組とくくくくくくくく
善海子女房中くを新む
痛みいれかもし地とみく
満よりる骸骨何をも女情
風そよく切露花の化
破くくく冷茶ハ秋のむ
こぬ春の梅子野を懐む
月月の茶ハ流るくくく
金持様子 柏のみを地

角 下 角 下 角 下 角 下 角 下 角 下

葉生葉のそと世物ぬ奴ににきん
 十の孫云ふる学事はれおお
 寸法沙地の衣はみしつたふ
 着る力む率初は大小
 伴の多門を足をもよるのや
 凡丈三百人の事うらま

寛文十戌年

果と居るとさそれ之肌をぬくを衣
 夏走り可居りゆり玉民
 かけ作し河系おまに欠渡り

助勝

宗房
 正助

同

城ハ家の玉おた刀の一葉切
 くと山矢の根よりつとふ秋風
 冷しき石はささつと虎子似と

長忠

宗房
 定就

同七未年 一白附

肩の忘物うらものつらむお難お
 くとをたしけと河川おりの家
 好生おのひとみさあつて
 志和の鈴あつてやまのつと刀

宗房

お

踏らぬふらふらおきさつ〜
わらわをけし〜うら〜海をかえん
初

延宝六年

大抵層の物も〜に不二の観
故にさ〜れ舟田子の海より
配書

虫の聲白雲と〜ふら〜
瓜の中ごの密巻り〜

孔子ハ鯉魚のさ〜み〜
お起す〜巻去の垣〜

既經其居〜
若〜しき〜何れ道〜

物〜多〜鬼の甜食の生〜
南〜や海村の油木〜

珠橋〜大息熱の若〜
仁義昔の藤〜

猪欄のふ〜こ〜
大字の海をふ〜

上ハ船き〜中ハ竹 篋
 友中ハに張子并〜の禮是る
 甲子かあふ長持のしり
 送る指是か〜の禮是る
 息の弱きを海子流め〜
 女院 語〜の二位の尼願
 大政の退屈〜の茶する
 味香棧の七の〜の稲葉山

旁ハ〜の茶のす
 みのま小櫃ゆ〜玉のせ
 子響〜の茶のす
 昔の〜の茶のす
 是〜の茶のす
 是〜の茶のす
 昔〜の茶のす



